



タイトル 乾燥標本収蔵1号室
大英自然史博物館 迷宮への招待
DRY STONE ROOM NO. 1
原題 *The Secret Life of The Natural History Museum, 2008*
著者 Richard Fortey (リチャード・フォーティ)
訳者 渡辺政隆(わたなべ・まさたか)、野中香方子(のなか・きょうこ)
出版社 NHK 出版
発売日 2011年4月25日
ページ数 451p

本書は、三葉虫の世界的権威として知られ、かつサイエンスライターでもあるリチャード・フォーティによる大英博物館の展示室や研究部のツアーガイドで、表舞台もさることながら裏舞台の紹介は興味深いものがあります。本書の主人公はフォーティ自身ではなく、主人公は「自然史博物館」とそこに集まった「標本」とその標本を取り囲む「奇人変人のニュラリスト達」です。原題にもあるように、*Natural History Museum* に *The* が付いているのは「*The*」を冠することで唯一無二の「自然史博物館」を名乗っているというわけです。

第1章の初めの方に、『人生は記憶という名の館長が管理するコレクションで成り立っている。人は思い出や出来事を拾い集めて保管し、半ば忘れ去り、あるいは心の奥の棚にしまい込む。なかには思い出したくないこともあるが、そうやって保管されたもののすべてが、よくも悪くも自分という人間を作り上げている』とあります。

人生の大半をこの荘厳な博物館で過ごしてきたため、ここでの経験が自分の気質の大部分を形作っており、しかも、このことは部外者の誰よりもよく知っていると自負し、この自然史博物館の自然史を記し、ここに生息してきた人類の群像とその生態をくわしく話をするには自分が適役だと述べています。

さて、目次を覗いてみましょう。

第1章 舞台裏への入口

第2章 「分類」との闘い

- 第3章 雄弁な化石達
- 第4章 恵みの動物界
- 第5章 美しき動物劇場
- 第6章 小さなつわものども
- 第7章 眠れる原石
- 第8章 「ノア方舟」の軌跡
- 第9章 変わりゆくミュージアムの館

興味をそそる話題が満載ですが、博物館といえども人間関係は普通の職場と変わらず、館長や研究部長との葛藤、変人の学芸員、「盗み」や「ごまかし」など何とも思わない輩も出てくるのは我々の周りの職場の状況となんら変わるところはありません。

1753年に寄贈された個人コレクションから始まり、250年以上の歴史を持つ博物館です。1881年に開館して以来、改築や増築が重ねられた結果、展示物の裏側は迷路のように入り組み、人々の記憶から忘れ去られた「開かずの間」も存在するといいます。

さて、原題の「乾燥標本収蔵1号室」は著者が、ある日誰も開けたことのないドアを開けてみると、そこは、時代錯誤的な展示品の数々が静かな眠りにつく禁断の部屋であった。すっかり忘れ去られた場所で、しかも、そこは館員が密かにデートする場所になっていたという噂もあった。

体の真ん中で切断されたようなひからびた年代物のマンボウの陰で愛を囁くのは、ここがロマンチックだからというよりも、必要に迫られてのことだろう、また、マンボウもたくさんのみだらな行為を目撃したであろうとユーモアたっぷりに語ってくれます。

本書の中ほどには話題の人物や動物や植物たちのカラー図版が出てきて楽しませてくれます。中にはチャールズ・ダーウィンと共に進化理論を発表したアルフレッド・ラッセル・ウォレスが作成した「チョウとガの標本」も出てきて、さながら博物館を巡っている錯覚に陥ります。

昆虫研究部の面々は、その種類が多いこともあって、この分野に関る人に求められるのは

- ・人並み外れた粘り強さ
- ・底知れぬ構成力
- ・驚異的な記憶力
- ・細部まで見逃さない注意力

- ・絵の才能
- ・的確な文章を書く能力
- ・物事を最後までやり遂げる意志

等が必要とされ、「しょっちゅう無駄口をたたくような人には向いていないよ」と研究部員達が持つ特異な能力をリストアップしています。

大聖堂のような建物の中は、何処に何があるかも見当もつかない迷宮のようなところで、しかも陽の光も入らない暗い場所で、無数の研究者たちが黙々と膨大な数の骨・化石や、ホルマリン漬けの標本と取り組んでいる様は、英国のミステリー小説さながらの雰囲気を感じさせます。

その所為か、第7章に「アメシスト」の話が出てきます。なんでもない石(石英)なのに、その「アメシスト」にまつわる呪いの話です。図版にもエドワード・ヘロン-アレンの「呪われたアメシスト」とあり、現在は鉱物研究部の引き出しの奥にしまいこまれているそうです。

カラー写真の説明には「この写真もあまり長く見ない方が良くかも知れない」と注意書きがありますが、「不吉な」歴史を重ねてきたにしては、ごく普通の石のようですが、著者もその石に手を触れた時にはかなり緊張したそうです。

大英自然史博物館の初代の館長は、頭脳明晰で、野心的ではあったが、ときに悪辣なことも行い、ダーウィンの進化論には猛反発した比較解剖学者の草分けであったリチャード・オーエンでした。

二代目の館長は、サー・ウィリアム・フラワーです。ダーウィンのブルドックといわれたトマス・ヘンリー・ハクスリーの友人で、しかも筋金入りの進化論者で、展示を進化論に沿って展示した人物でもあります。この館長がダーウィンの大理石像を1889年に発注したと言われていますが、オーウエンの像の方は1900年まで待たされたとあります。オーエン、ハクスリー、ダーウィンの関係は本書ではさらっと書き流していますが、スウィーテクの「[移行化石の発見](#)」の中にも登場し、三者の確執がかなり詳しく述べられています。

三代目の館長のエドウィン・レイ・ランケスターはオックスフォード大学動物学部の教授で、1901年にオカピを科学界とマスコミに紹介する際に、オカピの背にどっかりと乗った姿を「パンチ」誌の戯画に描かれたことで、一躍有名になった人です。

しかし、ニール・チャーマーズが館長になってからは、科学は自活を強いられ、怠け者や変人など、得体のしれない人物の居場所はなくなってしまい、館長になるのに、科学的な名声は重要でなくなり、科学者が自然史博物館の活動の中心にいた時代は終わったと著者は嘆いています。

科学の世界では近年起きた最も重要な変化は、分子技術の登場です。まず、DNAの構造が解明され、続いて遺伝子配列の解読の可能性が語られるようになり、やがて一生物の全ゲノム、ひいてはヒトゲノムまでもが解読され、この技術は新しい高みに到達しました。

ゲノム解読は当初、とてつもなく困難な挑戦と見なされていましたが、今ではごく普通に出来るようになり、大英博物館を含め、相応の研究機関であれば、どこも分子生物学研究室を備えています。そこは白衣の科学者が詰めていて、徹底的に管理された分析装置の前で試験管を手につけて働いている姿が目につくようです。

現代では、生物はその根本をなすDNAやRNAを構成する分子に至るまで暴かれてしまいます。遺伝子の解読は、従来の形態学が数え上げていた生物の特徴—すなわち、脚の毛、貝殻の棘、骨のパターン、花の構造など—にとてつもない量の情報を付け加えました。ゲノムは想像を絶するほど膨大なため、塩基配列に閉じ込められている情報は、ほぼ無限です。特定の生物の分類を専門とする従来の学者を雇う金で、分子生物学者を雇うのがブームとなっているといえます……。

このようなゲノムレベルでの発見は、系統分類学に大きな影響を及ぼしたところではありません。自然を見るための全く新しい方法が手に入ったわけです。遺伝子の中には、数億年前、あるいは数十億年前に、動物や植物の根本的な構造が分岐したのを「見た」ものさえあるといえます。

1991年、線虫の遺伝子の塩基配列の80%以上が哺乳類のそれと類似していたことが判り、人々を驚かせました。人間は虫や細菌と同列の存在だということがはっきりわかったというのも愉快ですね。

遺伝子の解析により、菌類が植物でないことが明らかになりました。博物館のコレクションを系統化する際に軸となった昔の分類法では、隠花植物はすべてひとまとめにされていたわけですが、しかし今では遺伝子の系統樹のおかげで進化史の深部を覗きこめるようになり、菌類はおよそ20億年前という地球の歴史のごく初期に、他の全ての生物と異なる道を歩み始めたわけです。大まかにいうと、菌類は、藻類、シダ類、顕花植物へとつながる植物よりも、動物へとつながる原生動物に近いというのです。

信頼は科学の研究にとって必須のものだというのに、その掟を破った人物にアーサー・キングズベリーとリチャード・マイナーツハイゲンの二人が登場します。博物館の標本をくすねた疑惑を持つ連中ですがその話が8章に出てきます。なかでも群を抜いて悪質だったのがリチャード・マイナーツハイゲン大佐だっ

たといいます。彼は、冒険家、軍人、鳥類学者、猛獣ハンター、スパイなど、信じがたいほど多彩な経歴の持ち主でした。

アラビアのロレンスこと T・E・ロレンスは著書「知恵の七柱」(Seven Pillars of Wisdom)でマイナーツヘイゲンについてこう述べている。「彼は、悪を善の馬車に繋ぐことをいとわなかった」(平凡社)とあります。私の本棚にある「知恵の七柱」(東洋文庫)の 69 章を覗いてみると、「マイネルツハーゲン(翻訳のまま)は軍人稼業に紛れ込んだ渡り鳥の研究者」とあり、ロレンスはマイネルをかなり嫌っていたふしがあります。

しかし、故意に欺くことは、科学における究極の大罪であるとし、二人とも暴露されないまま死んだというのが何とも腹立たしいと著者は悔しがります。

サッチャー首相の登場で、英国の生活の多くの側面が変わりましたが、大英自然史博物館も例外ではありませんでした。1980 年代には、評議員会の構成が変わり、メンバーの中に成功した実業家を相当数入れるべきだということになり、主教やオックスフォード大学の名誉教授が外され、企業の CEO (Chief Executive Officer つまり、最高経営責任者) が加えられました。これは、象牙の塔に現実主義という新しい精神を植え付けるうえで必須の変化だったようです。産業界の長から見れば、博物館というものは整理の対象でしかないようだと言者は嘆きます。

2009 年には、古い建物の裏手にダーウィンセンターが新築オープンします。ここは、来館者が自由に見て回れる部分もあり、一部の標本収蔵室とラボはガラス越しに中が丸見えになっています。

ただ、このようにテーマパーク化し、近代化がなされる一方で、現代の博物館は研究者に専門の生物に精通するだけでなく、資金の調達者であり、企業家であり、コンピュータの専門家であることを要求します。このように博物館の研究環境は悪化の一途をたどっており、実情は、「大英自然史博物館にしてそうなのだ」という著者フォーティの暗澹とした思いが伝わってきます。

大英帝国が栄華を極めた時代に、当時の趣味人たち(いわゆるアマチュア)は、未知の土地の宝物、動植物、化石、鉱物などを収集しました。この時期に、これらの情報収集し、記録し、整理し、分類する学問である博物学(現在は自然史)が誕生し、大英自然史博物館が誕生します。

本書は、大英自然史博物館に 40 年以上勤めた「三葉虫マン」である著者による博物館やそこに棲む個性豊かな住人に対する熱い思いがしみ込んだ書です。甲虫専門家の「ビートルマン」、コウモリ専門家の「バットマン」など個性豊かな

で、語るべき物語を持っているナチュラリスト達に対する著者のユーモアたっぷりの紹介は心和むものがあります。

フォーティの名ガイドにより、読み終わると、大英自然史博物館をひと巡りしてきた気分になります。お薦めの書です。

2012.1.22

